

死海文書の謎

マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著
高尾利数 訳

第12章『使徒言行録』

福音書自身を別にすれば、新約聖書のうちで最も重要な文書は、『使徒言行録』である。事実、歴史学者にとっては、『使徒言行録』はさらに重要な意義を持つものでさえある。党派性の強い出所をもつすべての歴史的な文書と同様、それはもちろん、懐疑的に、注意深く取り扱わなければならない。われわれはまた、このテキストが誰のために書かれたものなのか、誰の役に立ったのか、そしてどういう目的のために書かれたのかについて知らなければならない。だが、今日まで、「初期キリスト教」の最初の年月についての明らかに決定的な報告をしてきたものは、福音書ではなく、『使徒言行録』であった。確かに『使徒言行録』は、他には簡単に見出されることのない多くの基本的情報を含んでいるように思われる。その点だけでも、それは諸展開の可能性を含んだテキストである。

一般に認識されていることであるが、福音書は、歴史的な文書としては信頼できない。諸福音書のうち最初のものである『マルコによる福音書』は、紀元後六六年の反乱以前に編纂されたものではなく、おそらくそれよりも若干後代のものであろう。四福音書はすべて、それらが編纂された時よりもずっと以前の時代を呼び起こそうとしている。それらはごく簡単に歴史的背景を略述し、本質的には大いに神話的なイエスの姿と彼の教えに焦点を当てている。それらはつまるところ詩的なものであり、宗教的な文書であって、年代記であろうとさえしていない。

『使徒言行録』は、非常に違った性質の文書である。もちろんそれは、絶対的に歴史的なものだとは受け取れない。第一にそれは非常に偏見に満ちている。このテキストの著者であるルカは、明らかに多くの違った資料に依拠しており、それらの資料を、自分自身の目的に合わせるように編纂し書き直している。教義的叙述であれ文学的スタイルであれ、統一しようという試みはほとんどなされていない。教会史家でさえ、『使徒言行録』の年代記述が混乱していること、著者が述べている事件の多くについて何も直接の経験を持っていない、諸事件に自分自身の秩序を押し付けようとしていることを認めている。そういうわけで、或る別々の事件が一つの事件のなかに混入されていたり、一つの事件であったものが、別々の事件であるかのように書かれている。そのような問題は、パウロの登場に先立つ諸事件に関するテキストの部分において時に尖鋭に見られる。さらに『使徒言行録』は、福音書と同様、選択的に編纂されたものであり、後の編集者たちによって大いに手を加えられているのである。

それにもかかわらず『使徒言行録』は、福音書とは違って、連続した、そして長い期間にわたる一種の年代記であろうとしている。福音書とは違って、それは、一つの歴史的記録を保持しようとしており、少なくとも一定の箇所においては、叙述する出来事についての直接の、あるいは間接の経験に基づいて書かれたものである。偏見はあるが、その偏見はごく個人的なもので、このことによって現代の注釈家は、ある程度まで、行間を読むことができるのである。

『使徒言行録』において語られる物語は、十字架刑の直後から始まり——一般的には紀元後三〇年とされるが、紀元後三六年まで下るかもしれない——紀元後六四年と六七年の間どこかで終わる。たいていの学者は、物語そのものは紀元後七〇年と九五年の間の或る時点で編纂されたか、転写されたと信じている。とすれば、大まかに言って、『使徒言行録』は、福音書の全部とはいわないまでも、若干のものと同時代だということになる。四福音書全部よりも早い時期かもしれない。いわゆる『ヨハネによる福音書』より前のものだということは、ほぼ確かである。少なくとも、そのテキストがわれわれに伝えられている本文の形態においてはそうである。

『使徒言行録』の著者は、自らを**ルカ**と称する高い教育を受けたギリシア人である。『コロサイの信徒への手紙』四：一四でパウロの親友として言及されている。「愛する医者**ルカ**」と同一人物であるか否かは、決定的には確認することはできない。もっとも、新約聖書学者たちは、彼が「愛する医者**ルカ**」であるということを受け入れようとしているのであるが。現代の学者たちはまた、彼が明らかに『**ルカ**による福音書』の著者と同一人物であることに同意している。実際、『使徒言行録』は時として『**ルカ**による福音書』の「後半部分」であると見なされている。どちらも、「テオフィラス」という名前の未知の受取人に宛てられている。どちらもギリシア語で書かれているので、多くの単語や名前がギリシア語に翻訳されていて、おそらく多くの場合には、ヘブライ語やアラム語の言語からはニュアンスにおいても意味においてさえも変えられているであろう。いずれにせよ、『使徒言行録』も『**ルカ**による福音書』もともに特にギリシア人の読者のために書かれたものである——クムラン文書が宛てられていた読者とは非常に違っている。

『使徒言行録』は、その物語の後半を独占するパウロに主として焦点を当ててはいるが、エルサレムの教会とパウロの関係についても物語っている。この教会は、「主の兄弟ヤコブ」の指導の下にあったイエスの直弟子から成るもので、後になってから「最初のキリスト教徒」と呼ばれるようになり、現代では「初代教会」あるいは「原始教会」と呼ばれている〈飛び地〉(エンクレイプ)ないしは〈派閥〉(ファクション)であった。しかしながら、『使徒言行録』は、この教会とパウロの関わりを物語るに際して、パウロの見解しか示していない。『使徒言行録』は本質的にパウロ的な——あるいは現在では「規範的」と思われている——キリスト教の文書なのである。言い換えれば、パウロは常に「ヒーロー」なのである。彼に反対する者は誰であれ、それが当局であれ、あるいはたとえヤコブであれ、自動的に悪人にされるのである。

『使徒言行録』は、イエス——彼は「ナゾレ人」(ギリシア語ではナゾライオン)と呼ばれている——が、舞台から姿を消した直後から始まっている。それから物語は、エルサレムにおける共同体、つまり「初代教会」の形成と発展の物語、およびそれが当局との葛藤をますます増大させていくという物語に進む。この教会は、『使徒言行録』二：四四—四六において、生き生きと描かれている。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有し、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き……」。(ついでながら、彼らがこのように神殿に固着していたことは注目に値する。イエスと直弟子たちは普通神殿に敵対的であったと描かれている。福音書によれば、イエスは神殿で、両替人たちのテーブルをひっくりかえし、祭司たちからの激しい嫌悪を被った)。

『使徒言行録』六：八は、最初の正式な「キリスト教徒の殉教者」であるステファノという名の人物を紹介する。彼は逮捕され、石打ちによる死刑の宣告を受ける。ステファノは、自分を弁護しつつ、「義人」あるいは「正しい者」の来臨を預言した人々が殺されてきたことを引き合いに出す。この呼び名は、その性格において特にクムラン的でユニークである。「義人」は、『死海文書』では繰り返し「ザディク」(あるいは「ツァディク」(Zaddik)として登場する。巻物のなかの「義の教師」(モレー・ハ・ゼデク、Moreh ha Zedek)も同じ語源に由来する。そして歴史家ヨセフスが、メシア的で反ローマ的なユダヤ人の信奉者たちの指導者として、明らかに「サドック」あるいは「ザドク」という名前の教師に言及するとき、これもまた「義人」の間違ったギリシア語読みであるように思われる。とすれば、『使徒言行録』において描かれているステファノは、クムランにとってユニークな、そしてとりわけ特徴的な名称を用いているのである。

これは、ステファノの演説のなかに現れてくるクムラン的関心の唯一のものでもない。彼は、自分の弁明において、彼を迫害する者たちを次のように呼んでいる(『使徒言行録』七：五三)。「[あなたがたは]天使たちを通して律法を受けた者たちなのに、それを守りませんでした」と。『使徒言行録』が描くように、ステファノは明らかに律法に熱心に固着していた。ここにもまた、正統的な、通説となっている伝統との葛藤が見られる。後のキリスト教的伝統

によれば、律法を厳しく、そしてピューリタンの崇拝したのは、当時のユダヤ人たちであった。「初代のキリスト教徒たち」は、少なくともユダヤ人たちの厳しさという見地からすれば、慣習や慣行を軽蔑し、新しい自由と柔軟性を提唱していた<異端者(マヴェリック)たち>あるいは<反逆者(レネゲイド)たち>として描かれている。だが、最初の「キリスト教徒の殉教者」ステファノこそが、律法の唱道者として立ち現れているのである。他方、彼を迫害する者たちは、その怠慢を非難されているのだ。

自ら律法に固着する者と宣言するステファノが、その同じ律法を激賞する仲間のユダヤ人たちによって殺されるというのでは、話が合わない。だが、もしこれらの仲間のユダヤ人たちが、ローマ当局と協力するようになった祭司たちを代表していたとすれば、どうであろうか。もし彼らが実際——例えば、ドイツ軍の占領下にあった多くのフランス人たちのように——ただ「静かな生活」を望み、彼らのただなかに報復を惹き起こしかねない煽動者やレジスタンスの闘士を恐れていた、とすればどうであろうか。ステファノがそのメンバーであった「初代教会」は、絶えず自分たちの正統性と熱心な律法への固着を強調していた。この教会を迫害していた者たちは、ローマと仲睦まじくしようとしていた者たちであり、そうすることで、律法から外れ、あるいは、クムラン的用語を用いれば、律法に違反し、律法を裏切っていた者たちなのである。こういう文脈に置いてみれば、ステファノが彼らを非難したことも、彼らがステファノを殺したことも辻褃が合う。そして、後に述べるように、ヤコブ——彼は「義人」、「ザディク」つまり「義なる人」、「主の兄弟」と呼ばれ、律法への輝かしい固着を最もよく例証した人物である——が、後に、後代の伝承によれば、ステファノとまさに同じ運命を辿るのである。

『使徒言行録』によれば、パウロ——当時はタルソのサウロと呼ばれていた——が登場するのは、ステファノの死に際してであった。彼はステファノに対する迫害者たちが衣服を投げ捨てるのを側で見ていたと言われているが、もっと積極的な役割を果たしていたのかもしれない。『使徒言行録』八：一では、サウロが「ステファノの殺害にまったく賛成していた」と告げられている。そして後に『使徒言行録』九：二一では、パウロは、まさにステファノの死に極まった「初代教会」への一種の攻撃を行っていたと非難されている。確かにサウロは、彼の生涯のこの段階においては、「初代教会」に対する敵意ということにおいて、熱心であり、熱狂的でさえあった。『使徒言行録』八：三によれば、彼は「教会を全面的に破壊しようとして、家から家へと押し入り教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた」。当時、彼はもちろん、親ローマ的な祭司たちの寵児として振る舞っていたのである。

『使徒言行録』九章は、サウロの回心を物語っている。ステファノの死後すぐに彼はダマスкасへ向かう。そこの「初代教会」のメンバーたちを捜し出すためであった。彼は襲撃隊に伴われていたし、彼の主人である大祭司からの逮捕状を持っていた。すでに見てきたように、彼のこの遠征は、おそらくシリアへのものではなく、『ダマスкас文書』のなかに現れるダマスкасへのものであったであろう。

彼の遠征の途上、サウロは、何か精神的な外傷として残るような経験をする。それについての注釈者たちの解釈は、日射病から、癲癇の発作、神秘的啓示に至るまで様々である(『使徒言行録』九：一一一―九、二二：六一―六)。「天からの光」が彼を襲い、彼を馬から落ちさせ、どこから来るとも分からない「声」が、彼に要求する。「サウロよ、サウロよ、なぜ私を迫害するのか」。サウロは、その声が誰のものか尋ねる。「あなたが迫害している私は、ナゾレ人イエスである」とその声は答える。その声はさらに彼にダマスкасへ行くように指示を与え、そこで彼が次に何をなすべきかを知るであろうと告げる。この「顕現(ヴィジティション)」が過ぎ、サウロが以前の意識を取り戻したとき、彼は一時的に盲目になっていたのに気付く。ダマスкасで「初代教会」の一メンバーによって彼の視力は、回復させられ、彼は洗礼を受ける。

現代の心理学者ならば、サウロの経験について何も特別に異常なものを見出さないであろう。それは実際日射病や癲癇の発作によって惹き起こされたのかもしれない。同様に、幻想やヒステリーあるいは精神病的反応や、ひょっとしたら手を血で汚していた感受性の強い人

間の良心の痛みにも帰せられうる。しかしながらパウロは、これを、彼が個人的にはけっして知ることのなかったイエスの真の顕現だと解釈する。そしてこれが彼の回心を惹き起こす。彼は自分の以前の名前を捨てて、「パウロ」という名前を選ぶ。そして彼は後に、それ以前に「初代教会」を根絶させようとしていたのと同じような熱心さをもって、今やその「初代教会」の教えを広めるのに熱中する。彼は、この教会に参加し、その見習い、ないし弟子の一人になる。彼の『ガラテヤの信徒への手紙』によれば、彼は三年の間、彼らの指導を受け、その時間の多くをダマスカスで過ごす。『死海文書』によれば、クムラン共同体への新参者のための見習いおよび訓練期間も三年間であった。

パウロは、三年間の見習い期間の後に、エルサレムに戻り、そこの「共同体」の指導者たちと一緒にしようとした。当然ながら、彼らのうちの多くの者は、彼の回心を完全には信じられず、彼を疑っていた。『ガラテヤの信徒への手紙』一：一八一―二〇では、彼はヤコブとケパにだけ会ったと述べている。使徒たちも含む他の誰も、彼を避けていたようである。彼は繰り返し自分を証明するほかなく、そうすることによってだけ若干の味方を得られたのであり、説教を始めることもできた。しかしながら議論は続き、『使徒言行録』九：二九によれば、エルサレム教会の或るメンバーたちは、彼を脅かした。醜い状況が起こるのを避ける手段として、彼の味方たちは、彼を、生まれ故郷であるタルソ(現代ではトルコにある)へ急いで送り出した。彼は故郷に送られて、実際そこでメッセージを広め始めた。

これは追放に等しかったのだということを理解することが大事である。エルサレムの教会は、クムランの共同体がそうであったように、パレスティナの諸事件にほとんど完全に忙殺されていた。ローマのような外の広い世界に関心があったのは、その世界が、彼らのもっと身近な現実に影響を与えたり、侵害してきたかぎりにおいてであった。それゆえ、パウロをタルソへ急いで送り出したことは、暫定的なIRAのゴッドファーザーが、新入りの、良い訓練を受けていない、そして過剰に精力的な新兵を、「輝く道(シャイニング・パス)」の間で支持を集めるためにペルーに送り出すことになぞらえられるかもしれない。もし彼が、ありそうもない僥倖(ぎょうこう)によって、どうにかして人や金や資材や、あるいは何か価値のあるものを引き出すことができたなら、それはそれで結構である。もし彼がその代わりに腹を切り裂かれるようなことになっても、過剰に惜しまれることもない。どうせ彼は、利益になるよりむしろ邪魔だったからである。

そのようにして(『使徒言行録』によれば)パウロの外国への三つの〈単独出撃(ソーティーズ)〉の最初のもので生じてきたのである。彼はその出撃では、所もあろうにアンテオケに行く。そして、『使徒言行録』一一：二六から知られるように、「弟子たちが初めて〈クリスチャン〉と呼ばれたのは、アンテオケであった」のである。注釈者たちは、アンテオケへのパウロの旅を、ほぼ紀元後四三年のこととしている。その頃までには、その地で「初代教会」の一つの共同体が形成されていて、ヤコブの下にあるエルサレムのその宗派の指導部に報告を送り返していたのである。

それから約四―五年後、パウロの伝道の仕事の内容に関する議論が起こったとき、彼はアンテオケで教えていた。『使徒言行録』一五章が説明するように、エルサレムの指導部の或る代表者たちが、アンテオケに到着する。おそらくパウロの活動について調べるといふ特別の目的を持っていたのであろう、とアイゼンマンは提案する。彼らは、律法に厳格に固着することの重要性を力説し、怠慢であるとしてパウロを非難する。パウロと彼の同僚であるバルナバは、直ちにエルサレムに戻り、その指導部と個人的に相談するように命令させる。この時点から、パウロとヤコブとの間の分裂が始まり、それが広がっていく。そして『使徒言行録』の著者は、この論争に関するかぎり、パウロの弁護者になる。

後に続くあらゆる浮沈のなかで、強調されなければならないのは、パウロが事実上最初の「キリスト教的」異端者であるということ、そして彼の教えが――それは後のキリスト教の基礎になるのだが――[エルサレム教会の]指導部によって激賞されていた「本来の」そして「純粹な」形態からの甚だけしからぬ逸脱であったということである。「主の兄弟」ヤコブが、文字通

りイエスの親族であったにせよそうでなかったにせよ(万事は親族であったことを暗示しているのだが)、彼がイエスを——あるいは後にイエスとして記憶された人物を——個人的に知っていたことは明らかである。エルサレムの共同体、つまり「初代教会」のメンバーのほとんども——もちろんペトロも含めて——そうであった。彼らが語ったとき、彼らは直接的権威(ファースト・ハンド)をもって語った。パウロは、自分が自らの「救い主」と見なし始めた人物をそのように個人的にはけって知らなかった。彼はただ砂漠で半ば神秘的な経験をし、身体を持たない声を聞いたただけであった。このことに基づいて自分に権威があるのだと称することは、控え目に言っても、思い上がったことであった。この経験に導かれて彼は、イエスの教えを、本来のものと見分けがつかないほどに歪曲してしまう——つまり彼は事実、彼自身のきわめて個人的な、そして独特な(特異体質的な・イディオシンクラティック)神学を形成するのであり、そしてそれを偽ってイエスに由来すると称して合法化するのである。厳密にユダヤの律法に固着していたイエスにとっては、彼自身を含めて、およそ死ぬべき人間を礼拝することを提唱するなどとは最も極端な冒瀆であったであろう。イエスは、福音書においてこのことを明らかにしている。彼は、自分の弟子たち、自分に従ってくる者たち、聴衆に、神のみを認めるように強く勧めていた。例えば、『ヨハネによる福音書』一〇：三三―三五において、イエスは自分が神であると主張しているとの廉で非難されている。彼は『詩篇』八二を引用しながら答える。「あなたたちの律法に〈わたし(『詩篇』のなかの神の意)は言う。あなたたちは神々である〉と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが〈神々〉と言われている」と。

パウロは実際、神を脇に押し退けて、初めて、イエスを礼拝することを創唱した——イエスは、アドニス、タンムズ、アッティス、その他の当時中東に住んでいた〈死んで甦る〉神々と一種同等な存在になるのである。これらのライヴァルの神々と競うために、イエスは、あらゆる点において一つ一つ、またすべての奇跡においても逐一、彼らと競合しなければならなかった。多くの奇跡的要素がイエスの伝記と結び付けられていったのは——十中八九、いわゆる処女降誕や死人のなかからの復活をも含めて——この段階のことであったであろう。それらは本質的にパウロの発明であって、エルサレム教会のヤコブや他の者たちによって広められていた「純粋な」教義とはしばしばひどく食い違うものであった。それゆえ、ヤコブや彼の側近たちが、パウロのやっていることに当惑させられたことは、ほとんど驚くに値しない。

だがパウロは、自分のやっていることを十分承知していた。彼は、驚くほど現代的な識見(sophistication)をもって、宗教的プロパガンダの技術を理解している。彼は、一人の男を神に仕立てあげるために何が必要かを理解しており、ローマ人が彼らの皇帝について成した場合よりもっと抜け目なく立ち回る。自らははっきりと認めるように、パウロは、史的イエス——ヤコブやペトロやシメオンが個人的に知っていた人物——を伝えるような振りをしない。逆に彼は、『コリントの信徒への手紙二』一一：三―四にあるように、エルサレム教会が「異ったイエス」を宣べ伝えていると認めている。彼らの代表者たちは、自らを「義の僕(しもべ)」と呼んでいる、と彼は言う。この「義の僕」とは、特徴的なクムランの用語なのである。彼らは今や、あらゆる点で、パウロの敵手なのである。

パウロは、彼に与えられた指示に従って、アンテオケからエルサレムに戻り——それは一般に紀元後四八―四九年頃と信じられている——そこの教会の指導部と会う。当然ながら、また論争が起こる。もし『使徒言行録』が信じられるとすれば、ヤコブは、平和のために、妥協に同意する。それによって「異教徒たち」は集会に参加しやすくなった。ありそうもないことだが、ヤコブは、律法の一定の面を緩和させるのに同意する——他の面については厳格であり続けるのだが。

パウロは指導部に対して口先だけで敬意を表す。この時点では彼はまだ彼らの是認を必要としている——彼の教えを正当なものとしてもらい、彼が外国で設立した諸教会の存続を保証してもらうためである。しかし彼はすでに、「わが道を行く」決意をしている。彼は次の伝道旅行に出掛け、エルサレムへの再度の訪問によって中断されはするが(『使徒言行録』一

八：二一)説教を続ける。彼の手紙のほとんどは、紀元後五〇―五八年のこの時期のものである。彼の手紙から明らかなることであるが、彼は、この頃までには、エルサレムの指導部からも、また律法への固着からもほとんど完全に離れてしまうようになる。彼の『ガラテヤの信徒への手紙』(紀元後五七年頃)において、彼は、「おもだった人々」のことを辛辣に当て擦っている。「わたしは、おもだった人たちからも強制されませんでした。——この人たちがそもそもどんな人であったにせよ、それは、わたしにはどうでもよいことです」(『ガラテヤの信徒への手紙』二：六)と。彼の神学的立場も、律法に厳しく忠実である人々から回復不可能なまでに離反していった。彼は同じ書簡のなかで(二：一六)言っている。「人は律法の実践によってではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる……律法の実行によっては、誰一人として義とされないからです」と。これらの言葉は、自ら宣言した背教者の挑発的で挑戦的な宣言である。後にパウロから進化していったような「キリスト教」は、この頃までには実質上その根との関係を絶ってしまい、何かイエスと関係があるものとはもはや言えず、ただイエスについてのパウロのイメージとだけ関係するようになったのである。

紀元後五八年までには、パウロは再度エルサレムに戻っている——彼の支持者たちからの戻るなという訴えにもかかわらずである。支持者たちは、明らかに上層部との争いを恐れていて、パウロに行かないように懇願したのである。パウロは再度ヤコブおよびエルサレム教会の指導者たちと会う。彼らは、今ではもう御馴染みのクムラン的用語をもって、他の「律法に熱心な者たち(ゼーロータイ)」と共有している憂慮の念を表明する——つまり、パウロが、外国に住んでいるユダヤ人たちに説教する際に、モーセの律法を破棄するように勧めているということへの憂慮である。そこから受ける印象では、パウロは嘘を言い、偽証をし、彼に対する告発を否定しているようである。七日間身を潔めるようにと要求され——それは告発の不正と、律法への彼の変わらぬ忠誠を示すためであった——彼は直ちにそうするように同意する。

しかしながら、その数日後、彼はまた、ヤコブほど寛容ではない「律法に熱心な者たち」と衝突する。彼は、神殿にいるのを見られ、一群の敬虔な者たちに襲われる。彼らは激怒して主張する。「この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところで誰にでも教えている」(『使徒言行録』二一：二八以下)。暴動が起こり、パウロは神殿から引き摺り出され、彼の命が危険に晒される。彼は折りよく、この騒動のことを聞いたローマの将校によって救出される。その将校は一群の兵士たちを伴っていた。パウロは逮捕され鎖を掛けられる——明らかに最初は、パウロがスィーカリ派の指導者、ゼロテ党のテロリストの幹部だという想定である。

この点で物語は、ますます混乱する。そしてわれわれは、その一部が変えられたか削除されたか疑うほかない。現在のテキストによれば、パウロは、ローマ軍が彼を運び去る前に、自分がタルソのユダヤ人であると抗議し、たった今彼をリンチにかけようとしていた群衆に話をするのを許可してくれるように頼む。奇妙なことに、ローマ人たちは彼がそうするのを許可する。そこでパウロは、自分がガマリエル(当時の有名な教師)の下でファリサイ派の訓練を受けたことについて、彼が最初は「初代教会」に対して敵対的であったことについて、ステファノの死に際しての彼の役割について、その後の彼の回心について長々と話す。これらすべてが——あるいはひょっとしたらその一部だけが(どちらかは確認できないが)——群衆を新たな怒りに駆り立てる。彼らは叫ぶ。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない」(『使徒言行録』二二：二二)と。

ローマ人たちは、これらの訴えを無視して、パウロを「砦」に運んでいく——おそらくローマの軍事的・行政的司令部であったアントニアの砦であろう。ここで彼らは、パウロに拷問を加えて取り調べをしようとする。何のために彼を取り調べるのか。『使徒言行録』によれば、なぜ彼が群衆にあのような敵意を掻き立てたのかを決定するためである。だがパウロはすでに公然と彼の立場を明らかにしていた——もっとも、彼の演説のなかに、テキストによっては明らかにされないような仕方、ローマ人たちに彼が危険で反乱的であると思わせたよう

な要素があったのであれば別であるが。いずれにせよ、ローマ法によれば、十分な、そして正式なローマ市民権を持っているいかなる者に対しても、拷問は執行できなかった。そしてパウロは好都合なことに、タルソの裕福な家の生まれで、それを持っていた。その免除を懇願することによって彼は、拷問を免れる。だが彼は監禁されたままだった。

その間に、四十人から五十人の激怒したユダヤ人の一団が、密かに会合する。彼らは、パウロを殺すまでは飲食をしないと誓う。この敵意の激しさ、凄まじさそのものは、注目に値する。「通常の」ファリサイ派やサドカイ派からは、そのような暴力への決意はいうに及ばず、そのような敵意は予期できない。そのような敵意を燃やす者たちは、明らかに「律法に熱心な者たち(ゼーロータイ)」である。だが、当時のパレスティナにおいて、律法に対してそのような情熱的な忠誠心を持っていた者たちは、後にクムランで発見された聖なるテクストを残した者たちだけであった。そういうわけで例えば、アイゼンマンが注意を喚起している『ダマスカス文書』の重要な一節では、次のように宣言されているのである。「人が、全身全霊をもってモーセの律法に立ち返ることを誓った後で、違反を犯すならば、彼に報いが加えられなければならない」と。

パウロに対して計画されたような暴力的行動は、〈合意〉によって表明されたような、温和で禁欲的で静寂主義的なエッセネ派という通俗的なイメージと、いかにして和解させられるであろうか。パウロを除去しようという秘密投票や熱烈な誓い——こういうものは、戦闘的なゼロテ党、および彼らの特別な暗殺集団、恐れられていたスィーカリ派の特徴により近い。ここにおいても再度、一方においてはゼロテ党、他方においてはクムランの「律法に熱心な者たち」が、同一の者たちであったという考えが執拗に起こってくる。

彼らが誰であったにせよ、『使徒言行録』によれば、自称暗殺集団は、これまで触れられていなかったパウロの甥の突然の、そして折り良い出現によってその実行を妨げられた。この甥は、どのようにしてか、彼らの計画を知ったのである。この親戚——われわれは彼についてはこれ以上何も知り得ないのだが——は、パウロにもローマ人たちにも情報を流す。その夜、パウロは、彼自身の安全のために、エルサレムから連れ出される。彼は、四七〇人の兵士たちに護衛されて連れて行かれる——二人の百人隊長の命令下の二百人の歩兵と二百人の槍部隊と七十人の騎兵である！ 彼は、ユダヤにおけるローマの首都カエサレアに連れて行かれ、そこで総督とローマの傀儡王アグリッパの前に現われる。だがパウロは、ローマ市民として、彼の事件をローマで取り調べてもらう権利を持っていた。そして彼は、この権利を行使する。その結果彼は、裁判のためにローマへ送られる。何のために彼が裁判にかけられるのかについては、何の指摘もない。

『使徒言行録』は、彼の旅行途上の冒険——難破も含めて——を物語った後で終わる。というよりはむしろ、その著者が仕事を中断させられたかのように、あるいは元来の結びの部分が除去され、その代わりにお座なり終末部分が挿入されたかのように、突然とぎれる。もちろん後には無数の伝承が生まれた——パウロは投獄されたとか、皇帝が個人的に彼の話を聞いたとか、釈放されてスペインへ行ったとか、ネロが彼の処刑を命令したとか、彼がローマで(あるいはローマの牢獄で)ペトロに会ったとか、彼とペトロとが一緒に処刑されたとか、である。しかし、『使徒言行録』にも、また信頼できる他のいかなる文書にも、これらの伝承を基礎付けるものは何もない。おそらく『使徒言行録』の元来の結びは実際に削除されるか変更されるかしたのであろう。ひょっとしたら著者のルカは、端的に「次に何が起こったのか」を知っておらず、そして美的平衡感覚などに無関心で、単に中途半端な終わり方をしたのかもしれない。あるいはひょっとすると——アイゼンマンが暗示するように——そしてこの可能性については後に検討するが——ルカは知っていたのだが、その知識を隠蔽するために、意図的に叙述を打ち切った(あるいは後代の編集者によって短縮された)のかもしれない。

『使徒言行録』の最後の部分——神殿で起こった暴動から後の部分——は、ゴタゴタし混乱し、答えられない疑問だらけで謎に満ちている。だが『使徒言行録』の他の箇所は明らかにきわめて単純である。一方においては、パウロの回心とそれに続く冒険についての物語が

ある。だがこの物語の背後には、エルサレムの原初の共同体、つまり「初代教会」内部の二つの分派間のますます増大する争いについての年代記が潜んでいる。これらの分派の一方は「鷹派(ハードライナー)」から成っており、彼らはクムラン文書の教えに呼応するもので、律法を厳格に遵守することを主張している。他方は、パウロと彼の直接の支持者たちによって代表されていて、律法を緩和させようとしているし、人々が教会に参加しやすいようにすることによって、新しい参加者の数を増やそうとしている。「鷹派」は、数よりも教義的な純粋さにより大きな関心を寄せており、パレスティナの外での事件や展開にはお座なりの関心しか持っていないし、ローマとの和解への願望など一切示していない。他方パウロは、教義的純粋さをなして済まそうとしている。彼の主たる目的は、彼のメッセージを出来るだけ広く伝播させ、可能なかぎり多数の信奉者たちを集めることであった。彼は、この目的を達成するために、当局にわざわざ敵対することを避けようとするし、ローマと調停したり、ローマのご機嫌を伺ったりすることさえまったく辞さない。

とすれば、『使徒言行録』に見られる「初代教会」は、生まれつつあった分裂によって引き裂かれていたが、その分裂の煽動者はパウロである。パウロの主たる敵手は、「主の兄弟」ヤコブという謎に満ちた人物である。ヤコブが、後代の伝承において「初代教会」として知られるようになるエルサレムの共同体の承認された指導者であったことは明らかである。たいていの場合ヤコブは、「鷹派」として登場しているが——もし『使徒言行録』が信用できるならば——一定の点については妥協する用意があることを示している。しかしながら、すべての証拠が暗示するところによれば、この最も穏健な柔軟性ですら、そのことに対する『使徒言行録』の著者の側での何ほどかの承認を反映している。明らかにヤコブを、この物語から削除することはできなかったであろう——彼の役割は、案じるどころ、あまりにも良く知られていたものであった。結果として彼は、幾分格下げされて、調停的な人物として——パウロと極端な「鷹派」のどこか中間に位置する人物として——描かれるほかなかった。

いずれにせよ『使徒言行録』の「下書き(サブ・テキスト)」は、ヤコブとパウロという二人の強力な人物の間の衝突に還元される。アイゼンマンは、ヤコブが元来の一連の教えの番人、教義的純粋さと律法への厳格な忠誠心の代弁者として現われていることを例証した。「新しい宗教」を創設するなどということは、およそ彼が考えもしなかったことであろう。だがパウロのしていたことは、まさに「新しい宗教」の創設であった。パウロのイエスは、完璧な神であり、その伝記は、奇跡の一つ一つに至るまで、パウロが信者獲得で競っていたライヴァルの神々のものにマッチしていた——結局のところ、神々も、石鱈やペット・フードが売られるのと同じ市場原理に基づいて売られるのである。ヤコブの基準に従えば——そして実にどんな敬虔なユダヤ人の基準に従っても——こういうことはもちろん冒瀆であり背教であった。このような問題が惹き起こす情熱を考えると、ヤコブとパウロの間の分裂は、『使徒言行録』が暗示しているような具合に、品位ある討論のレベルなどに限られることはほとんどありえなかったであろう。それは、この物語の終わりに表面化されたような殺人をも辞さない敵意を生み出したことであろう。

ヤコブとパウロの間の争いにおいて、われわれがキリスト教と呼ぶものの誕生と進化は、一つの分かれ道に立っていたのである。もしその発展の主流が、ヤコブの教えに添ったものとなっていたならば、キリスト教など全然存在しないことになったであろうし、それはユダヤ教の一つの特別の分派に留まったであろう。それは優勢なものになったかもしれないし、ならなかったかもしれない。だが、実際に起こったことは、新しい運動の主流は、次の三世紀の間に、パウロと彼の教えを中心に次第に合同していったのである。このようにして、ヤコブと彼の仲間の死後、疑いもなく恐ろしいことには、実にまったく新しい宗教が生まれたのである——つまり、その創始者と目される者[イエス]とは、ますます関係ないものになっていった宗教がである。(以上。第12章『使徒言行録』 [全文抜粋](#))